
最強主人公もどきが消えるまで

片岡

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最強主人公もどきが消えるまで

【Nコード】

N5293Z

【作者名】

片岡

【あらすじ】

モバゲーで公開していたもの。あつちでは「ありがち最強主人公が消えるまで」。全然モバにありがちな最強主人公にならなかった。ので題を変えました。

加筆修正してあるのでモバのほうとは色々と違いが出ています。でもきつと初見の方が多いはずなので其処はあまり気にしないで大丈夫かな。

内容はそのままです。主人公が“最強主人公”を消す話です。色々キモいです。この作品の主成分はヤンデレです。ご注意を。

一話一話の長さは全然揃ってない。

タグの“腐った人”からはモバでつけていただいたタグです。

不快？理解不能？我々の業界では（ある意味）褒め言葉ですが何か。自分勝手に、自分のことは棚に上げて、自分が一番可愛くて、でも人間ってそんなもんだよね。……そんなお話。

初めまして、最強主人公アンチ派です（前書き）

話が進むにつれて身勝手なヤンデレたちが多数登場。

合う人には中々好評な作品ではありましたが、合わない方は本気で合わないみたいなので注意。

温いけど色々あれれな表現も。

“あ、こりゃもう駄目だ”とか思われましたら逃げて下さい。

初めまして、最強主人公アンチ派です

魔法。それは、俺たちにとっては必要不可欠なものだ。

魔法がなければ此処までの人間の進化は有り得なかったし、そもそも生存することすら不可能だったと言われているほど。

それは誰にでも扱えるもので、これが使えない者は落ちこぼれとして見なされる。

しかし、誰にでも扱えると言っても才能というものがある。その才能を伸ばす為、魔法学園という魔法使いのための学園が作られた。

そんな俺たちの通う魔法学園に、ある入学生がやってきた。

その入学生の名前はカイト・リーブ。此処らでは有名な“落ちこぼれ” だった。

「おい、何を見ているんだ？」

「っマキ……」

不意に声をかけられ、思わずびくつく。俺の様子を見て、すまんと謝ったあと、俺の友人であるマキはまた訊ねた。

「ああ……、ああ、ちょっと、」

言葉を濁す俺を不思議に思ったのか、俺の視線の先を辿り、マキはあからさまに顔を曇らせた。

「、早く行こう」

早く此処から離れたい、とマキは俺の腕を引く。

其処から離れる前に、もう一度楽しそうに笑うあいつらを窓から見下ろし、目を伏せた。

木漏れ日があいつらを包み込んで、容顔は整っているあいつらだから、とても神秘的な一つの絵のようだった。

「……カイト・リール」

かの有名な現・闇帝の息子を親友に持ち。

「カイトは博識ですね!」

現・光帝の娘と、この学園自慢の天才少女を惚れさせて。

「わあ、カイト、凄い!」

「カイト……、凄いね。私でさえ知らなかったことを知っているなんて」

魔法が使えなかったのは実は全属性を持っていて、それらが互いに相殺しあっていたから使えなかっただけ。

今はちゃんとコントロールできるようになったからこの大陸でも五本の指の中には入る天才魔法使いになり。

SSランクの任務で手を抜けるほどの実力で。

誤解が解け今までずっと縁を切られていた家族ともよりを戻し。

ああ、ああ、良かったな。恵まれてるな。幸せだな。今までの苦労が報われたな。おめでとう。

でも知ってるか？ その幸せの裏でどれだけ人間が傷つき、悲しんだか。

「……俺は、自分のことしか考えられねえからさ」

お前も幸せになる権利はあるよ。あるんだろうな。だけど、その代わりに俺の友達が傷つくのはさ、納得できねえな。

初めまして、カイト・リーブルアンチ派です
(最強とか、天才とか、悲劇のヒーローとか)

初めまして、最強主人公アンチ派です（後書き）

SSランクとか言っちゃってるけどギルドとか出てきません。
そうです。ギルドの仕組みを私がよくわかっていないだけです。

俺の友達

俺には友人が何人かいるが、特に親しいのが二人、一学年下にいる。そのうちの一人がマキ・シグナルだ。

シグナルの名を聞いたことのない魔法使いは、まずいないと思う。

魔法界には魔法の皇帝と呼ばれるほど、魔法に優れた方たちが四人いる。

光帝、闇帝、土帝、水帝。その名の通り、それぞれの属性を得意とする魔法のエキスパートたちだ。

そしてマキは現・水帝の息子。子供ながらにかなりの实力を持った奴だけど、その実力の裏には多大な努力が隠されているということを知っている。

俺以外にもマキの努力を知っている奴がたくさんいたから、マキは僻まれることもなく、たくさんの友人を持って毎日楽しそうに笑っていた。

しかし、そんなマキが今、酷い虐めに遭っている。それは、あることが原因だった。

いつだったか、リーブルたちが闇帝の息子と光帝の娘と学園一の天才を引き連れて歩いていたんだ。迷惑なことに、廊下のド真ん中で横に目一杯広がって。

勿論、人にぶつかるな。そんなことしてたら。

そうしたら案の定、マキの友達（ちなみに俺の友達でもある）が

ぶつかって怪我をってしまったんだ。

正義感が無駄にあるマキは猛烈に怒って、リーブルを校舎裏に呼び出した。

「お前、いったいどういうつもりだ！！ 人にぶつかっておいて、謝りもせず、それどころかあいつを怒鳴りつけるなんて！」

「は……？ なんの話だよ」

頭に疑問符を浮かべたリーブル。ああ、それが普通の反応だろうな。いきなりそんなこと言われたって、わからないと思う。

俺はこのとき、ちょうど二人して校舎裏に行くのを目撃したから心配になってついていった。ストーカー？ うるせえよ。

「ミックだ！ ミック・チゼッタ！！」

「ああ、あいつ」

リーブルは面倒臭そうな顔をした。マキは顔を怒りで真っ赤にしてリーブルをきつく睨みつけている。

少し出ていこうかとも思ったけど、俺まで加わったらリンチとかって勘違いされそうだ。出ていけないほうが良いかもしれない。

ただでさえリーブルは学園で一番人気のあった光帝の娘を惚れさせてるってんで妬まれてるから。取り巻きは結構そういうのに敏感になっている。

いや、何もわからない。多分マキもそう思ったと思う。それと同じ時に言い表せないほどの怒りがマキから冷静さを奪って。

「お、前ええッ!」

だからあんなことをしてしまったのだと思う。リーブルを殴るなんて、そんな馬鹿なこと。

相手との実力差がわからない馬鹿じゃない。相手が周りからどれだけ慕われている人間かわからない馬鹿じゃない。そんな人間に危害を加えるなんてことしたらどうなるかわからない馬鹿じゃない。

だけど、そんなこと考えられないくらい、マキは怒っていたんだ。大切な友人のために。

「ッ何しやがる!」

情けないことに今まで俺は固まっていたんだが、リーブルの声にやっと我に返って慌てて止めに入った。

そして怒りで興奮するマキをなんとか宥めて、自室に無理矢理押し込んだ。

そして次の日。マキの下駄箱はゴミで溢れ返り、誰かの横を通れば（主に女子だったと思う）魔法を仕掛けられたり、足を出され転びそうになったり。

まるで、子供のような嫌がらせ。最初は鼻で笑っていたマキも、

それがずっと続くと言に日に日に疲れた様子を見せていた。やつれて、顔色が悪い。

勿論、これらのことは昨日のことが原因だ。

リーブルは容顔が有り得ないくらいに整っている。そんなあいつが顔を真つ赤に腫らして帰ってきたものだから、クラス中は大騒ぎになった、らしい。

どうしたと訊いてきた奴には“マキ・シグナルに殴られた”と大声で喚き、訊いてもいない奴にも“マキ・シグナルに殴られた”と大声で喚いたという。

結果、マキは学園中の敵に。しかも、よりによってマキはあの気違いと同じクラスだ。本当に、可哀想に。

俺は、何も出来なかった。

可哀そうな俺の友達

(あんまり涙を見せないあいつが泣きながら言っただ)(助けてくれって)

もう一人の俺の友達

前にも言った通り、俺には特別親しい友人が二人いる。そのもう一人の友人がミック・チゼツタだ。

実は、こいつは現・天帝の息子だ。凄過ぎる友人たちに囲まれて俺の存在が霞んでいるように思える。と、まあ、それは置いといて、少し気が弱いのが玉に瑕きずだが、優しくとても良い奴だ。……優しすぎるのも、玉に瑕だ。

実力はあるのに、ぽやぽやにこにこしているからかミックは馬鹿にされやすい。

だけど、やっぱり穏やかな奴だから、リーブルたちに不当な扱いを受けても「ぼくは大丈夫だから」と苦笑して、俺たちを宥なだめる役に回っていた。

怒っても、何も悪くないのに。

一度、どうしてそんなに笑っていられるのかと訊ねたことがある。すると、ミックは笑っていった。

「馬鹿にされるのは確かに悲しいけど、その分僕が頑張って馬鹿にされないようにすれば良いだけでしょっ？」

どうしたんだろっ、こいつ。どうしてこんなに良い奴に育ってるんだろっ。お兄さん、思わず目頭が熱くなりました。

健気過ぎるぞお前……！

だけど、そんなミックが最近、苛々している。

「ねえ、僕、胸の此処が、凄くムカムカするんだ。……気持ち悪い」

昨日は笑顔でそんなことを吐き捨てていた。少し怖かった。

原因はマキが受けている理不尽な苛めだ。

苛めというものはまあ理不尽なものだが、その理由がマキの場合、あんまりにも理不尽すぎる。

マキはミックに怪我をさせたり卑劣に謝罪を求めにいっただけだ。だというのに、あいつが意味のわからないことを喚きだすから、こんなことになってしまった。

確かに、こつちも手を出したのは悪かった。俺たちは確かに、悪いことをした。

でも、そういうことをする原因となったのはやっぱりあいつで。

……俺の考えがマキ寄りなだけなのかもしれないが、俺にはマキが悪いとは到底思えなかった。

ミックもそう思っているからこそ、苛々している。

ミックのあの気の抜けるような可愛い笑顔が、俺たちにとっての何よりの癒しだった。

「怖いんだ、僕。こんなに真っ黒な感情を抱えて、自分が自分ではなくなってしまうよつで……っ」

泣いて、それでも苛立ちを抑えられなくて。

最近のミックの眉間には深い皺。目つきは鋭く、口を固く結んで。苦しい、痛い、ムカつく。目を赤くして、表情を怒りの色に染め上げて。

怒りを露わにすることは少なかったミック。ストレスで胃に穴が開かないことを祈ろう。

もう一人の、最近苛々してる俺の友達

(あんまり怒らなかつたあいつが眉を吊り上げて言うんだ)(あの子、赦せないよねって)

もう一人の俺の友達（後書き）

ちなみにモバでありがちだった最強主人公の設定

- ・容姿は上の上（笑）お寿司。
- ・めっちゃ落ちこぼれ。魔法使えない。
- ・実はフェイク。ギルドではかなりの実力者。なんか通り名ついでる。
- ・なんで落ちこぼれのふりしてんのかは結構あやふやにされてる。実際なんでだろうね。思いつかない。
- ・美少女ばつかに好かれる。周りに美形しかいない。
- ・作中に不細工は絶対に出てこない。出てきてもなんか可哀想な役回り。
- ・ライバルが物凄く安っぽい。だいたい性格の悪いお坊ちゃんとかヒロインのことが好きで嫉妬に狂った不細工。
- ・だいたい授業はサボって何処かで寝てる。勉強しろ落ちこぼれ。
- ・なのに何故か先生から信頼されてる。可笑しいだろ。

だいたいこれくらい押さえとけばこの作品を読むのに支障はないでしょう。

使い魔は大天使

今まで馬鹿な行動を散々とってきたリーブルだったが、此处にきて、またしても馬鹿げた行動を起こしてくれやがった。

我が魔法学園では、高等部に進級して、(リーブルにとっては入学して)五ヶ月ほど経ってから使い魔を呼び出す授業が行われる。使い魔とは地獄(魔界ともいう)、もしくは天界から俺たち魔法使いが使役するもので、だいたいの魔法使いは使い魔を従えている。

ちなみに、俺はあいつらより先輩だから、それはすでに済ませている。

俺の使い魔はなんでも神獣という奴らしい。狐みたいな姿で、これがまた愛らしい。今や俺たちの第二の癒しと化している。

もふもふは正義だ！ 悪い、ちよつと宣言したくなつたんだ。

ところで、優秀と言われている俺でさえこいつを召喚したときに腕を一本持っていかれたというのに、あいつは無傷で俺より格上の奴を召喚したんだという。

それは素直に凄いと思う。あいつの性格は認めちやいないが、あいつの実力だけは認めている。

あ、腕は運良く喰われなかったので魔法でくつつけた。痛かった。泣くかと思った。寧ろ部屋で召喚したばかりの使い魔キちゃんを抱き締めながら泣いてた。

後で心配してきてくれたマキとミックにドン引きされた。

使い魔以前に神獣に渾名をつけるのってどうなのとか聞こえない。

話を戻そうか。

それで、あいつも使い魔を呼び出したんだ。リーブルが呼び出したのは大天使だ。そういえば、俺の使い魔もこいつの使い魔も“魔”じゃないな。

現・闇帝の息子は闇の精霊の長。現・光帝の娘は光の精霊の長。天才少女はドラゴン。マキは水の精霊の長。ミックは土の精霊の長。

今年の一年は、実力を持った奴がまるで狙ったかのように集まったと思う。正直いつか抜かれてしまっんじゃないかとひやひやしている。

それで、リーブルが起こした問題というのが、その、天使との肉体関係、だ。うん、まあ、詳しく言わなくとも察していただけたらと思う。

誘ったあいつも悪いが、それに乗った天使も悪い。随分な尻軽天使だったらしい。

あいつの顔に釣られてあっさり……、こっつ……。これ以上俺の口から何も言わせないでくれ。

だいたいそんなことであればよく大天使だなんて位につけたものだと思う。本当不思議だ。

勿論、神はお怒りになられた。それはもうかなり。

お陰でキーちゃんも怒られてしまったらしい。とぼっちりだ。八つ当たりなんて神様も随分人間らしいところがあるな。

天使というのは清らかな存在でなければならぬ。清らかそのものであるような存在の直属の部下なんだからな。当たり前だ。

それが精霊ならまだ……、ことう……、いけたかもしれないのによ
りにもよって相手は人間だ。
もう誰にも庇い立ては出来ないだろう。あいつは神を敵に回した
んだ。

使い魔は尻軽大天使

（ああああ主様どうか慈悲をお与え下さい！！）（考え無しお間拔
け大天使様が堕ちていく）

俺の好きな人

唐突だが、俺はまだ十七だ。大人なのか子供なのか、微妙な年齢。ぶっちゃけ勉強よりも友達と遊んでるほうが好きだ。机に向かつてノート開いてるよりも森や洞窟に行つて探検するほうが好きだ。何が言いたいのかというと、普段大人っぽいとか言われててもガキみたいなのところがあるわけで。

一応、恋愛とかにも興味があつて、いや、うん、はっきり言う。好きな人がいるんだ。

俺の好きな人は学園の近くにある教会に住み込みで働いてるシスターだ。名前はセーラ。

ちよつと、あれ？ っと思つたろ。

……察しの通り、シスターっていうのは神に全てを捧げた女だ。俺なんかと汚い関係を結ぶことは許されない。

まあ、報われない恋とはわかつていてもだな、それでも俺はあの人が好きなんだ。想うだけなら、良いだろう？

ええつと、それで、最近その人、顔を真っ赤にしてボーっとしたり、食欲がなくなつたりと、ちよつとおかしいんだ。

嫌な予感がして、訊いてみた。もしかして、

「なあ、シスター」

教会脇にある花壇に水をやっていたシスターが、俺の声に反応して振り向いた。茶色の髪がさらりと揺れた。

「なんででしょう？」

「もしかして好きな男でも出来たか？」

俺とシスターは結構仲が良い。勿論、それは俺の影ながらの努力があつてのものだけど。

とにかく、仲が良いからよく相談を受けたりしていたんだ。だから、俺は今回もシスターの悩みを訊くという名目でこの胸の内の不安を取り除こうとした。

だけど、

「、っあ……。え、ええ……」

頬を染め、シスターはそつと俯いた。いや、もうな、このときの俺のショックは言葉じゃ言い表せない。冗談抜きで死にたかった。

シスターは至って平凡な顔立ちだけど、このときの顔は凄く可愛かった。でも、シスターにこんな顔をさせてるのは俺じゃなく、何処かにいる俺の知らない野郎。

想像してみる。惚れた女が自分以外の男のことで顔真っ赤にするんだ。死にたくなるだろう。

「へえ、そうか！　どんな奴なんだ？」

ああ、今俺は笑えてるか？　いつもの笑みでシスターの悩みを、恋の相談を聞いているか？

なあ、そいつ良い奴なんだよな。シスターが惚れた男だ。きっと俺が敵わないくらい男前で、優しく、完璧な奴なんだろう？

そうと言ってくれ。そうすれば、きっと諦めもつく。

期待にも似た気持ちでシスターを見つめる。シスターは恥ずかしそうに目を伏せて、呟いた。

「……知っていますか？　あなたの学園に入学してこられたと思うんですけれど。……カイト・リーブルさんという方で、」

どうしてよりもよってそいつなんだと。

リーブルは確かに実力はある。俺たちでも難しい任務だって一人で軽々とこなしてみせるといっし、天才と言っても過言じゃない。

だけど、聞く限り見る限りじゃ性格は最悪だ。

だけど、シスターが惚れた男なんだから。きっと俺がまだ知らないだけで、何処か良いところがあるんだろう。そうじゃなきゃ、悔し過ぎる。

「……シスター。大丈夫なのか？　その、シスターは神に全てを捧げた身で……、」

「わかっています」

間髪入れずにシスターは答えた。真っ直ぐに俺を見つめている。不安と、そして幸せな恋の色に染まった瞳で。

目が、逸らせない。

「でも、それでも好き……なんです」

ぞくりと、した。浮ついているようで、その言葉の芯はどっしりと重い。シスターは、本気なんだ。

たったそれだけの言葉で理解出来た。理解出来てしまった。シスターのどんなことでもわかるように、ずっと傍で見てきたから。

「どうしたら良いと、思います？」

シスターはそう訊ねた。

ああ、やめろ。そう、耐えるんだよ。悪いのは俺だから。いつまでも行動に移さずに、友達なんかで満足してた俺が悪いんだろ。

「……告白するしかないんじゃないかねえか？」

「告白」

「、ああ」

顔を真っ赤にしてシスターは俯いてしまった。困ったように視線を足元の辺りでうろつろさせている。

嘘。嘘嘘嘘嘘。嘘だシスター。やめてくれそんなことしないで。シスターは本当に良い女だから。だからリールがそれに気付いてしまったら、シスターがリールに取られてしまう。でも、偽善でもなんでも、俺はやっぱりシスターに幸せになってほしくて。

「頑張れよ！俺も出来る限り協力するから」

可愛い可愛い俺の好きな人

(でもその人は俺じゃない誰かを見ていた)

女の敵

俺はその日から頑張ってシスターを応援した。泣いてたマキも苛々してたミックも俺を気遣わしげに俺を見るほど。

「ごめんな、お前らがこんなに苦しい思いしてるのに、俺は……、」

こうして言葉に出してみると、自分の自己中心的な行動と考えを直視させられて嫌な気分になる。

でも、やめるわけにはいかない。自己満足ではあるが、せめて、とマキたちに謝ると、慌てて顔を上げさせられた。グキって嫌な音がした。

「うぐつ、!!」

「そ、そんなのいい！ 僕はお前たちと一緒にいれて、それだけで気が楽になるし、」

眉を下げて、マキは困ったように笑った。そう言ってくれるのは嬉しいけど、まず手を離してほしい。

俺はマキの手に自分の手を当て、さり気無く顔から退かした。

ミックもおおずおおと横から声を出す。

「大丈夫だよ。ぼくたちはそんなの、気にしてないから。あのね、でも、」

「そうか。……ありがとう」

あいつらが何を言いたいのかは気付いていた。

でも、それを言われてしまえば俺は、今度こそ諦めきれなくなる。だから遮った。俺の意図に気付いた二人はため息を吐いた。

「……僕が言えることじゃないけど、無理はするなよ」

「辛くなったら、あの、いつでも言ってるね？」

俺は笑ってみせた。

俺は学園内を彷徨い、リーブルを探していた。

リーブルを連れて、教会にいるシスターに会わせてやるのが俺の役目。シスターは其処でリーブルに告白する手筈になっている。

単純？ 知ってるよ、うるせえな。でも、こういう方法のほうが却って良い気がするの俺だけか？

「あ、いた」

よくリーブルが出没する中庭を探してみると、あいつはいた。珍しくリーブルは一人で歩いていて、時折立ち止まっては何か（花か？）を見ている。取り巻きたちはどうしたのか。だが、いないほうが都合だ。いたら喧しく騒ぐに違いない。あいつらは被害妄想が過ぎる。

「えーと、……よお」

とりあえず近付いて声をかけてみる。なんだかかなり気まずい。今すぐにでも逃げ出したい。胃液を吐きそうだ、っていうのはさすがにないが。

リーブルは訝しげな表情で振り向いたが、俺の顔を目に入れると、目を見開いた。な、なんだ、なんだ？

「あ、あんたッ……！」

「……覚えてたのか」

予想外だ。リーブルはあるとき マキとリーブルの殴り合いを止めたとき のことを覚えていたようだ。

あんなの会った内にも入らないだろうと思って初対面の振りして話しかけた自分を殴ってやりたい。恥ずかしい。悪い、前途多難だシスター。

「お、覚えてるに決まってる！ それで、俺になんの用なんだ？」

「少し、散歩に出ねえか？」

俺は阿呆なんじゃないだろうか。明らかに敵対関係にあると思われる人間に散歩に誘われてついていく馬鹿が何処にいるんだ。しかも其処まで親しくもない。これは出直すしかないな。

「ああ！」

あ、此処にいたわ。

やけに嬉しそうに頷くあいつ。何故だ。俺がマキに愛想を尽かして自分側についたとでも思っているのだろうか。

まあ、どうでも良いと俺はリーブルを連れて教会に向かった。

「シスター」

見慣れた背中が教会の庭にある花に水やりをしている。俺はそれに迷わず声をかけた。

細い肩がびくと跳ねて、勢い良くこっちを向いたシスター。じょうろに入っていた水が跳ねて修道服にかかった。

わたわたと慌てている。可愛い。

「も、もう……?」
「ああ」

驚いている、だがとても嬉しそうにしているシスターには悪いが、俺はこれ以上此処にいたくない。

シスターは最早、俺など眼中にないようで一心に俺の背後にいるリーブルを見つめている。

今すぐシスターの恋路を全力で邪魔したい気持ちに駆られた。そんなことしたら俺の今までの苦労と我慢が水の泡だからしないけど。

「、頑張れよ」

こっそりシスターの肩を優しく叩き、声をかけて背を向ける。シスターは俺を見て、力強く頷いた。

そのまま去っていくこうとする俺に、リーブルが不思議そうに話しかけた。

「……? おい、何処に行くんだ?」
「忘れ物したんだ。少し、此処で待っていてくれねえか?」

散歩に行くのに何を忘れて困ると言うのか。

怪しく思われてしまっただろうかと恐る恐る様子を窺ってみると、なんの疑いも持っていないようだ。早く戻ってこいよ、とかほざいている。

……秀才だとか言われてるけど、こいつ実は馬鹿なんじゃないか

……？

とりあえず、適当に返事を返しておいた。そしてちょうど良い木陰に隠れる。

程好く近く、しかもあちらからは死角になっているのでよほどのことがない限り見つかることはないだろう。

「あ、あの」

退屈そうに佇むリーブルに声をかけるシスター。頬は可愛らしく紅潮している。拳を白くなるほど握り締めていて、傍目から見えずぐにわかるほど緊張しているようだ。

「……なんだよ」

面倒臭そうにリーブルは返事を返した。此処で無視とかがしていたら俺は間違いなく飛び出してリーブルに渾身の力を籠めたアッパーを決めていただろう。多分避けられるけど。

シスターは少し傷ついた素振りを見せるが、健気に笑顔を作った。

「カイト・リーブル……さん、ですよ。私は、」

「は？ なんてお前オレの名前知ってたんだよ。気持ち悪い」

えっ？

思わず声に出してしまつて口を塞ぐ。大丈夫、気付かれていない

はず。それよりも意味がわからない。どういふことだ。何が起った。

あいつは今、なんて言った？

「え……。あ、あの、私、貴方のことが好きでっ……！」

「だからストーカーか？ 気持ち悪い女だな。二度とオレに近付くな」

嫌悪の籠った、瞳。

シスターは顔を真っ青にさせた。俺は愕然とした。

「なん、で……！」

なんで、なんで、なんで！！

どうして自分の名を知っているか？ そりやお前が此処らでは有名な落ちこぼれだったからだ。

此処らでお前の名前を知らない奴はただの世間知らずの坊ちゃん
と御令嬢ぐらいだ。それくらい、少し考えればわかるだろう？

ストーカーだと？ ふざけるな。シスターがそんなことするわけ
ないだろうが羨ましい！ シスターにそんな性癖があるなら俺がス
トーカーされたい！

……じゃなくて、シスターはそんなことはしない。うん。

顔を覆って教会の中に走って行ってしまったシスター。リーブル
は面倒臭そうにそれを見るだけ。

今にもリーブルに殴りかかってしまいたいと震える拳を抑えつけ、

俺はその場に戻った。

リーブルは俺が来たとみると顔を輝かせて此方に手を振った。シスターにあんな酷いことをしておいて、どうしてそんなに無邪気に笑えるのか、俺にはわからなかった。

「随分遅かったけど、何してたんだ？」

「……急用が出来たから、帰ってくれるか」

笑顔で訊ねるリーブルに答えは返さず、俺は冷たく言い捨てた。大きく見開いたその中心に、俺が映っている。俺はこんなに冷たい顔が出来たのか。少し、驚いた。

「は？　ちょ、ちょっと……」

「帰れ」

もう一度言った。

まだ納得のいってなさそうな顔をしていたが、俺は無理矢理リーブルを帰した。

何度か振り向いて此方を窺っていたリーブルだったが、そのうち寂しそうな顔をして消えていった。多分、移転魔法を使ったんだと思う。

それを見送ってからすぐさま教会の中に入る。入った瞬間、シスターに泣きつかれた。

小さく嗚咽をもらすその身体を抱き止め、慰めにもならないだろうがシスターの背を優しく叩いた。

……ああ、本当に最悪だ。何がって、全部が。

俺の敵

(お前、最低だよ)

花を枯らしたのは誰だ

……ああ、シスターのことは今思い出しても気分が悪い。今にも泣き出しそうなシスターの顔が頭に鮮明に浮かび上がって、思わず顔を歪めた。

そんな顔を、見たかったわけではなかった。

あいつの隣で幸せそうに笑う顔を見たかったのかと問われれば、そうも言えないが。

だけど、シスターの悲しそうな見たかったのかと問われれば、それははっきりと断言出来る。違う、と。

ふと思った。リーブルは周りの人間に悪影響を与えているようだが、どうしてそんな奴があそこまで好かれるのか。

シスターに限って言えば羨まし、いや、違う。ああ、もう正直に言おう。滅茶苦茶羨ましい。

じゃなくて。周りの人間を苦しめ、歪ませているくせに、どうしてあいつは……。

歪ませている、と言えばあいつの取り巻きたちもそうだ。

前は中々可愛い後輩たちだと思っていたが、今はそうでもない。暫く見ないうちに随分性格ブスになっていたみたいだからな。

先日、こんな場面を見た。

「ねえ、あなた。調子に乗らないでよ」

聞こえてきた声に、物陰に隠れた。条件反射だろうか。不審者のような嫌な条件反射が身についてしまったものだ。

此処は廊下で、それなりに人通りはある。擦れ違う同級生、後輩、先輩方が皆俺から目を逸らして通り過ぎていく。待って、待って、待って、これは誤解なんだ。

「な、何がですか？」

見知らぬ女生徒の怯えたような声。対するはリーブルの取り巻き
の一人であるリン・フィリータ。現・光帝の娘だ。こんなところで
後輩らしき生徒をいびろうとは中々大胆な奴だな。

しかし、誰も助けない。皆、見て見ぬふりをしている。
当たり前だ。こんな面倒臭そうなことに関わったら自分にまで火
の粉が飛ぶ。気付かないふりをするのが賢明な判断だ。

「でも、なあ……」

泣きそうな顔をしている。此処で助けに入っても俺は学年が一つ
上だから、さすがにマキのようにはされない（出来ない）だろう。

「よう、」

フィリータたちの前に出ていこうとすると、思いきり腕を掴まれ、影に引つ張り込まれた。ちよ……、なんだなんだ！？

驚いて首だけで後ろを確認すると、其処にはミックがいた。何かあったのか、泣きそうな顔をして俺の腕を握り締めている。待て、俺の腕を潰す気が。

やめ、あ、本当離してくれ。頼む、頼むから。痛い、痛い痛い。た、助けてくれ！ 必死に念じているとそれが通じたのかやっとな腕を離される。

「み、ミック、どうした？ あの子、助けてやらねえと……、」

「駄目。駄目だよ、行かないで」

君までマキのようになってしまったら、ぼくはもう耐えきれない。そう言って、ミックははらはらと涙を零した。

「、放っておくことは出来ない。先生を、呼んでこよう」

「……うん」

先生を呼びに行く道中、ミックは目を伏せて「ごめんね」と呟くように言った。俺かあの子か、どっちに向けた謝罪かはわからなかったが、頭を撫でておいた。

結局あの後、先生のおかげであの騒動は収まって、あの子も暴言を吐かれた以外には特に何もされていないようだった。

良かった。怪我とかしてたらどうしようかと思ってたんだ。あいつら、なんか過激になったから。

話は変わるが、実はこの学園は初等部、中等部、高等部といったふうに校舎ごとに分けられている。

そして初等部から中等部へ、といったふうに進学する際には一々入学式が行われる。ぶっちゃけ面倒だ。

それで、フィリータは初等部入学当初は“光の華”なんて呼ばれていた。

顔良し、頭良し、性格良しと来ればフィリータが持て囃されるのにそう時間はいらなかった。それに、フィリータは光帝の娘だったから、そういうのもあったのかもしれない。

可愛いからっていつのまにかファンクラブなんてものも出来てたり……。

俺はシスターのほうが可愛いと思う。料理の味付けで砂糖と重曹を間違えてしまう辺りとか。料理は愛の力で完食した。

……話に戻ろう。ええっと、それで俺も結構前にフィリータと話したことがあったんだが、結構良い奴だったんだ。

中等部に入って暫くしてから一学年上と交流活動を行うのがこの学園の恒例行事なんだよ。それでフィリータに会ったんだ。

うん、本当に良い奴だった。物分かりが良くて、優しくて、みんなのまとめ役みたいなのがあったな。

だけど、リーブルが入学してから早一カ月。すぐにフィリータは華だのなんだの言われなくなった。理由は言わなくなっただけでわかるだろう。

「可哀想に、な」

ろくに面倒も見ないで、たまに気が向けば泥水ばかりやるからこうなるんだ。光帝様は物凄く後悔しておられた。

……それも後の祭りってやつなんだけどな。

華を枯らしたのはお前だ

（貴女たちみたいなの不細工、カイトには釣り合わないわ）（綺麗な華には、それ相応の綺麗な水をあげましょう）

辛い恋（前書き）

ちょっと書きたいことが上手くまとまらなくてぐだぐだ。

辛い恋

リーブルの取り巻きの中の一人に、ミーナ・ソレイトという女子生徒がいる。

そいつもリーブルと同じクラスで、取り巻きの中ではフィリータのようにかなりの地位（？）にあるそうだ。

学園一の天才の呼び名に恥じぬ頭脳を持ち、実力もかなりの腕前だ。

そして、俺の友人、マキの幼馴染でもある。

マキが言うにはあいつの周りには昔からあいつ自身じゃなくて、あいつの頭を見る奴が多かったそうだ。天才という枠でしか、自分を見てもらえなかったんだろうな。

だが、マキは違った。マキは、まあ……、ソレイトのことが好きだったらしく、いつでもあいつの味方であるように心がけたそうだ。

しかし、その努力も空しく、ソレイトは自分自身を見てくれる人間はいないのだと思いつ込み、周りを拒絶するようになってしまった。そうしてそのまま何年かが過ぎ、リーブルがこの学園にやってきた。リーブルはソレイトの拒絶をもともせず対等に話しかけてくれ、それが嬉しくて心奪われた、らしい。

……なんとなく、釈然としない。

そもそも、本当にソレイトは拒絶をしていたんだろうか。

本当は、マキに甘えていて、いつだって救いを求めている、だからリーブルを簡単に受け入れてしまったんじゃないだろうか。

だから今、苦しんでいる。

最近、リーブルとフィリータはちょっと良い感じらしい。何がって……、そりゃ、あれだろう。男女間の……、えっと。

まあそういうのがあってソレイトは最近目に見えて落ち込んでい
るらしい。

ソレイトとフィリータは所謂恋敵みたいな存在だったらしいし、
そりゃ落ち込むよな。

そして、今。

俺の視線の先にはマキとソレイトがいる。

マキがソレイトを呼び出しているのを、偶然見かけ、俺は後をつ
けた。ああいうこともあったし、少し心配だったからな。スト・カ
ーじゃない。

一方はやけに暗い顔をしていて、一方はやけに緊張した顔つきだ。
これからいったい何が始まるのだろうか。

「……みつ、みみみ、みんな、ミーナ」

蝉かよお前。緊張しすぎだよ。なんだ“みんな”って。自分で
も馬鹿みたいなことを言ったという自覚はあるのか、マキはちょっ
とだけ顔を赤くした。

対してソレイトは酷く冷めたような対応だ。

「今更、私になんの用だい、マキ」

瞳は、暗い。それを見てしまったのだろうか、マキは泣きそうにぎゅう、と眉間に皺を寄せていた。何かを言いたそうに口を開いては閉じてを繰り返す。

言いたいことはあるけれど、それを上手くまとめられないんだろ
う。

「お、お前は、」

ようやく自分の中で言葉の整理が出来たのか、やっと口を開けた。

「昔から天才だのなんだの言われているが、えっと、や……やっぱり馬鹿だな!!」

ああ、考え抜いた末がそれなんだ。

もつと、もつとなんか……、他に何かなかつたんだろうか。

余談だがあいつは“裏でツンデレ貴族”なんて呼ばれている。

ちよつとマキを馬鹿にしすぎた渾名じゃなかるうか。俺も初めて聞いたときは笑ったけど。ミツク？ ミツクは大笑いしてた。

マキの言葉が余程癢に障ったのかソレイトは顔を真っ赤にしてマキを睨んだ。

そりゃいきなり馬鹿だなんて言われたら誰だってムカつくだろうな。

「な、んだって!?! そういう君は昔からビービー泣いてばかり! その女々しさは相変わらずのようだね!」

子供の喧嘩か。

なんだこれ。ツンデレ対ツンデレか。サブタイトルは『素直になれない二人』か。

俺の個人的な見解になるけど、マキからのソレイトの小さい頃の話聞く限り、ソレイトは多分マキのことが好きだったんだと思う。マキは言うまでもなくソレイトのことが好きなんだろうし。両想いだ、両想い。

多分、今上手い言葉で口説ければソレイトは余裕で落とせると思う。頑張れマキ。

「馬鹿に馬鹿と言って何が悪い!」

「誰が馬鹿だ! 私は少なくとも君よりは優れた頭脳を持っているさ!」

「どうだかな!」

……なんか普通に喧嘩になりかけてる気がする。止めてきたほうが良いのか、これ。

あれ、可笑しいな。こんなふうになるはずじゃなかった。

「っだいたい、お前は昔からそうだった!」

「何がっ……!!」

「お前の傍にはいつも僕がいただろう！ お前は余所見なんかしないで僕だけを見ていれば良かったんだ!!」

「ッ!!」

ぼんつと一気に頬を染め上げるソレイト。俺はその言葉の急転換の仕方にぼかんとしてる。

……い、意外と言つなマキ。

幸せな愛

(恋とは落ちるものです) (愛とは積み重ねるものです)

類は友を呼ぶ

リーブルの取り巻きには男子生徒もいる。……いや、勿論そいつにリーブルへの恋愛感情はないと思う。

それで、その男子生徒、リーダー・ザーシャは俺の入っている委員会の後輩で、結構仲が良いほうなんだ。

あ、ザーシャは閻帝の息子で、フィリータの幼馴染らしい。そういえば、今年は四帝の子供たちが勢ぞろいしているんだな。かなり豪華だ。

ちなみに委員会は色々あって、ボランティア委員会なんていう校内、校外の美化活動に専念するようなものもあれば、魔法研究委員会なんて魔法のことについて色々研究する魔法のことに突っ込んだ委員会もある。

ボランティア委員会は断トツで人気なくて、魔法研究委員会は断トツで人気がある。俺たちが入っているのは後者の魔法研究委員会だ。

話を戻すが、最近リーブルが転入してきたことで、学園内の空気が不穏な感じになってきている。まだ表立って何かを仕出かそうなんて奴はいないが、それも時間の問題だと思う。

こんな学園だから、力を持った奴なんて山ほどいる。

いくらリーブルやザーシャといった実力のある奴がいたとしても、学年が上の奴らに束になってかかられたらひとたまりもないだろう。

戦闘でものを言うのは何も実力だけじゃない。知識や経験も必要になってくるんだ。

マキたちなんかには劣るが、ザーシャだって俺の可愛い後輩なんだ。このまま同級生や先輩方に滅多打ちにされるのを傍観しているだけっていうのは忍びない。

だから、俺はザーシャに忠告をしに行った。さすがに先輩方を止めに行く勇氣はないしな。

「……今、なんて言いました？」

「だから、リーブルとつるむのはやめておけ。後できっと大変なことになるぞ」

リーブルの力は良い意味でも悪い意味でも強大過ぎる。出る杭は打たれるって言うだろう。ただの嫉妬でリーブルを嫌う奴はかなりいる。

しかし、中にはリーブルのその強大過ぎる力を厭う奴もいる。

誰だって老いて死んでいくんだ。人間である限り、そのサイクルからは脱け出せない。とすると、どうだ。

果たして、老いたリーブルは己の強大な力を抑え続けることが出来るのか？

「失望、しました」

「……は？」

その疑問の答えはわからないし、そもそも全てが想像上のものではないが、そうなる可能性は零ではない。

リーブル自身に責はないだけに少し可哀想だが、一人の命と未来ある数多の命、どちらをとるかと言われれば答えなど決まっている。

目をかけてやってっている後輩が色々な巻き添えに遭うのは少し嫌だ。そんな気持ちで忠告した。

しかし、失望……？先輩なら後輩を守るべきだろうとか、そういう意味での失望だろうか。それなら本当にその通りだから俺には何も言えない。

「あなたまでそんなことを言うなんて、どうせ先輩もカイトの実力に嫉妬して、カイトを失脚させようとかそんな考えを持っているんでしょう？」

あれっ。

いや、違う。お前は何を誤解しているんだ。

「僕はカイトの親友です。誰がなんと言おうとも、僕はカイトの親友をやめるつもりはありませんよ」

「……そうか」

「はい、それでは」

同級生たちや先輩方の目を掻い潜ってあいつを助けてやれるわけがない。

救いは差し伸べた。それを跳ね除けられちゃ、仕方ないよな。

馬鹿は阿呆を呼ぶ

(カイトが僕の親友であることが僕の誇りです) (誇りが時に自分を傷つける刃となるのは御存知?)

類は友を呼ぶ（後書き）

委員会はノリで登場。どうしようかな。

ボランティア、魔法研究、えーと、なんだろう……。風紀委員？あ
と、えー……。図書委員、……。うん、あと何かあるんだよ、きつと。

賢い王には誰もがついてくる

アリータ姫という、美姫と名高い姫君を知っているだろうか。我が国と同盟を組んでいる隣国の姫のことだ。

その美しさは吟遊詩人が寄って集って歌を捧げたがるほどで、花のように美しく、太陽の光のように暖かな心を持った、などという謳い文句が最もポピュラーだろうか。

最近、そのアリータ姫が殺害されたということで、此処ら一帯の国は大いに揺れている。

その事件の全貌を知る人間は、いったいどれほどいるのだろうか。まあ、聞くに堪えない醜聞だ。手回しされて知らない人間のほうが多いだろう。

俺は全貌を知る人間のほうに入るんだが。

アリータ姫には、実は幼少の頃より将来を誓い合った婚約者がいた。その婚約者は我が国の王子、キース王子だ。

これまた酷く端正な顔立ちで、アリータ姫とは本当にお似合いだった。

此方も吟遊詩人に歌を捧げられるほどで、獅子のように雄々しく、太陽の光のように暖かな心を持った、という歌を聞いたことがある。自分のことではないようで気味が悪いからやめてほしいと本人は言っていたが。

それで話に戻るが、あの事件は実はリーブルのせいなんだ。リー

ブル自身が手を下したわけではなく、間接的にその原因になってしまったというか……。

事件のきっかけはアリータ姫の父親、つまり王からの依頼だ。

なんでも、アリータ姫は悪質なストーカーに遭っていたらしい。仮にも一国の姫に対してストーカー行為をするだなんて相手も肝が据わっていると思う。

まあ、それで王は娘可愛さにリーブルに娘の護衛を依頼したのだという。

リーブルはギルドでは中々名の知れ渡った人間らしい。なんだっ
たか、確か“蒼穹あおぞらの戦士”だとかってという呼び名がついているんだ
とか。晴れ男かよ。

それであいつはSSランクの任務で手を抜けるほどの実力らしい
から、名が広まるのは当然と言えば当然だ。だから、実力があるっ
て有名な奴に、王は依頼したんだ。

ああ、そうだな。愚かだな。

いくら実力を持っていたとしても、所詮は子供だ。“そういう”
プロに任せただけがずっと安心だった。

リーブルとプロの違いはなんだと思う。

……経験の、差だ。

数々の死線を潜り抜けてきたプロたちはわかっている。油断をす
ることがどれだけ危険か。自分の力を過信することが、どれだけ危
険か。

上には上がいるなんてよく言うだろう。プロたちはそんな経験を
してきたからわかっているんだ。

だが、リーブルは違った。そんな経験が無かった。なまじ実力が

あるだけに、油断が許されない状況に陥ったことがなかったんだ。

だから、みすみすアリータ姫を殺されてしまったんだろう。

しかし、実力を見ればストーカーとリーブルではリーブルのほうが力は上だった。だからストーカーは身代わりを使った。

そうしてあいつはまんまとそれに引つ掛かり、なんとその身代わりにさせられた奴を殺してしまった。

身代わりとなった人間はストーカーとは一切関係はなく、本当に巻き込まれただけのただの一般人だ。

それで王たちは結局それに気付くことなく、リーブルに感謝して多額の報酬を握らせた。

が、次の日だ。国中の予想を裏切ってアリータ姫は殺害された。犯人は、勿論そのストーカーだ。

ちなみにこのことをリーブルは知らない。知っていたらこんなふうのうとしていられないだろうな。

唐突だが、キース王子と俺は友人関係にある。アリータ姫が殺害されたと聞き、会いに行つたが、酷かった。

目の下にはあの日から眠っていないのか、濃い隈がすっかりと刻まれていて、目は据わっていた。瞳に宿っていたのは明確な殺意。

なんでも、近頃隣国に戦争を仕掛けるつもりらしい。とは言っても隣国には王以外罪はないのだからその他の兵や町民たちを傷つけるつもりはないようだ。

しかし、これは俺の予想だが、多分戦争だなんて大事にしなくとも王を差し出してもらえらると思う。

あの王は無能王と呼ばれていて中々有名だった。だけども今まで攻め込まれなかったのはきつとキースたちのような強い同盟国のおかげ

げなんだろう。

ああ、ところで、最近その無能王が具合が悪そうなんだと。何か病にでも罹ってしまったのだろうか。

それとも、アリータ姫たちに呪われていたり……、なんて、そんなことあるわけないか。

愚かな王には誰もついてこない

(貴方など、死んでしまえば良い) (私と、一緒に) (私の未来を奪った貴方に、幸せなんてあげない)

賢い王には誰もがついてくる（後書き）

ザ・責任転嫁。

でも仕方ないよね。いきなり大好きな人を奪われたら、そのとき一番近くにおいて大好きな人を守れたかもしれない人を憎むしかないよね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5293z/>

最強主人公もどきが消えるまで

2012年1月2日12時46分発行